

野口英世は金沢区長浜の官舎で暮らした!!



明治25年1月15日、則誠氏4男として、横浜市西区花咲町に生れる。
現在、財団法人神奈川県予防医学協会会長。神奈川県保健協会会長。

青木 巽氏を訪ねて

横浜市金沢区洲崎の青木邸にて(九月二日)



きき手 小暮葉満子
きろく 楠田 禮子

「手の無い先生だ!!」

先生はお小さい時に、横浜検疫所長濱措置場で、野口博士とお会いになっていらっしやるそうですね。
今日はその頃のことをお聞かせいただきたいと思えます。

青木 生活を一緒にしたというだけですがね……。あれは明治三二年、私はね七つ、まだ小学生の時です。左手がこんなになっていて、年中ハンカチでおおつていました。子供達は「手の無い先生だ」と言っていたので、おふくろが「あの先生は若いけど、とても偉い先生なんだよ。そんなことを言っはいいけない」とよく叱られたものです。

お母様は特に野口博士に目をかけておられたのですか。

青木 おやじが官舎の所長をしておりまして、独身の職員の面倒は、昔のことで、すから男の人の手の届かないところは、その家族がお世話するとか……。おふく

ろが、よく靴下などを洗濯してやったり、裁縫の達人でね、つくろいものをしてあげたりして、始終身のまわりの面倒を見てあげていたようですよ。ま、家族ぐるみのお付き合いということでしょうか。検疫所は困いがあってね。一般の人はぜんぜん入れなかつたのです。

お父様は医師でいらしたのですか

青木 いいえそうじゃありません。

当時野口博士は検疫所の中のどこにお住まいだったのでしょうか。独身寮の様なものがあったのでしょうか。

青木 やはり沢山ある官舎の一つに住んでいました。三浦のじいさんというのが居て、野口さんの賄いはその人が世話してましたよ。猪苗代町出身で横浜で開業していた六角さん(注・ご子息の夫人が現在、戸塚区に在住)が嘱託医としてよく長浜に出入りしておられ、六角さんの賄いは母が世話してましたね。六角さんがバスケットにめずらしい食べ物を入れて持って来ました。長浜では、外国人の出入りが多かったせいか、明治の頃に

パン牛乳お肉、トマトやチーズなどをすでに食べていましたから、あの時分じゃ相当ハイカラなものでしたねえ。そのせいか今でも好物です。

特殊区域 長浜

野口博士が研究室で研究されていくところを、ごらんになったことはございますか。

青木 長浜は特殊区域でしたから一般の人は門からは入れなかつたのですよ。広くて手入れの良く届いた所ですね……。外郭内郭があつて家族は中へ入れませんでした。やはり細菌を扱うところへは一般の人は全然行かれませんでしたね。父はきびしい人で絶対公私混同しない人でしたから、役所の中へは家族は入れませんでした。

長浜で日本で初めてのベスト患者が発見されていますね。日本中が大きなざざざだと思えますが、その頃の検疫所の様子を憶えていらっしやいますか。

古い話ですからね。今博士が生まれていたら百六才ですから。
青木 そうですね。おそらく兄達が生きていたら何んでも知っていたと思います。野口博士のことは申し訳けないのですが記憶があまりなくて……。昔よく聞いておけばよかったですね。父は几帳面な人なので筆書きで細かい日記をつけていた人でした。そんなものが沢山あつたのですが処分されたりして一部しか残っていません。

その中に野口博士に関することはございませんか。

青木 それが残念ながらありません。明治三十二年ですかその頃のはあまりないですね、当時の父の月給が二十円という記録が残っています。又消毒をする船が港に入る度に消毒検疫官に何回となく「任命及び免す」の発令を行ったようで、その発令書が古文書の中にあります。

先生のお父様は何年生れでいらつしやいますか。

青木 弘化四年生れです。(一八四七年)庭園のように

美しかった検疫所

検疫所はきれいな所だったのではありません。戦前までは本当に公園の様にきれいで、とにかくすばらしい所でしたよ。手入れが良くて、庭師兼下働きという方が四・五人いつも居て年中庭の手入れをしていました。



細菌検査室は野口博士が研究に使つた建物では日本に一つきりしか残っていないのです。ですからやはりそのままでの姿であの場所に残したいと思ひます。どうぞご協力下さいますように。



手入れの行届いた庭園から附属舎(和室のゲスト・ハウス)をのぞむ

青木 微力ですが……。

今日は奥様ともども、めずらしいお話を伺えて本当にうれしゅうございました。永い時間ありがとうございました。

注) 写真左側の付属舎(迎賓館)は解体・撤去されましたが、右側の一号停留所(検疫資料館)と庭園の一部は横浜検疫所輸入食品・検疫検査センターの敷地内(旧・長浜検疫所の一部)に現存しています。



出典
野口英世博士ゆかりの細菌検査室保存をすすめる会
『ながはま 第3号』1982 p4-5